佐久市埋蔵文化財調査報告書　第204集

野馬窪遺跡群

野馬窪遺跡Ⅴ

長野県佐久市猿久保野馬窪遺跡　第５次調査

２０１３，３
株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ長野支店
佐　久　市　教　育　委　員　会

例　　言

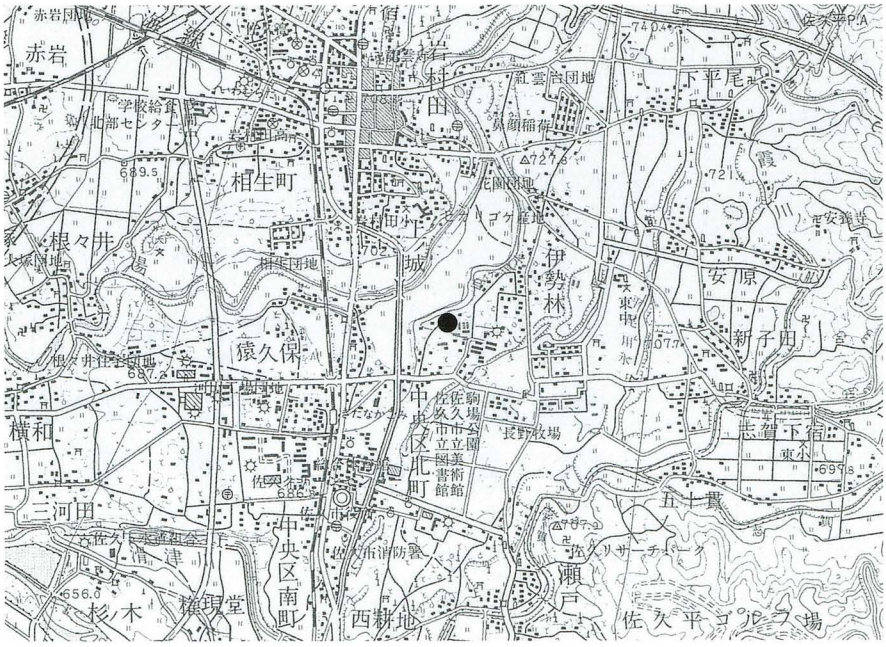
1．本書は、株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ長野支店が行う、移動通信用無線基地局（ＣＶ佐久猿久保ＲＫ）建設工事に伴う野馬窪遺跡Ｖの発掘調査報告書である。
2．調査原因者　株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ長野支店
3．調査主体者　佐久市教育委員会
4．遺跡名及び所在地　野馬窪遺跡Ｖ（ＳＮＫＶ）　佐久市猿久保167－５
5．調査期間及び面積　試掘調査　平成22年８月３日～８月11日・25日　面積　15㎡
　　発掘調査　平成23年９月４日～平成23年10月４日
　　整理調査　平成23年９月21日～平成24年１月20日
　　平成24年６月５日～平成24年８月17日
　　調査面積　215㎡（開発面積 185㎡、立木伐採・抜根範囲108㎡）
6．本遺跡の調査は林・佐々木、報告書作成は林・佐々木が行った。
7．本書及び関係資料等は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

凡　　例

1．遺構の略記号は、竪穴住居址（H）土坑（D）ピット（P）である。
2．挿図の縮尺は遺構１/80・１/60、遺物１/４・１/３・１/１である。挿図中にスケールを示した。
3．遺構の海抜標高は各遺構毎に統一し、水糸標高を標高として記した。
4．土層の色調は1988年版「新版　標準土色帖」に基づいた。
5．遺物挿図番号と遺物写真番号及び遺物観察表番号は一致する。
6．調査区は公共座標の区割りにしたがい、間隔は４ｍ×４ｍに設定した。
7．挿図中のスクリントーンは、以下のことを示す。

目　　次

例言・凡例・目次
第Ⅰ章　発掘調査の経緯
　第１節　立地と経過 ------1
　第２節　調査組織 ---------1
　第３節　調査日誌 ---------3
第Ⅱ章　遺構と遺物
　第１節　竪穴住居址 ------3
　第２節　土坑 ----------5
　第３節　その他 ----------8



第１図　野馬窪遺跡Ｖ位置図（１：50,000）

第Ⅰ章　発掘調査の経緯

1　経過と周辺遺跡

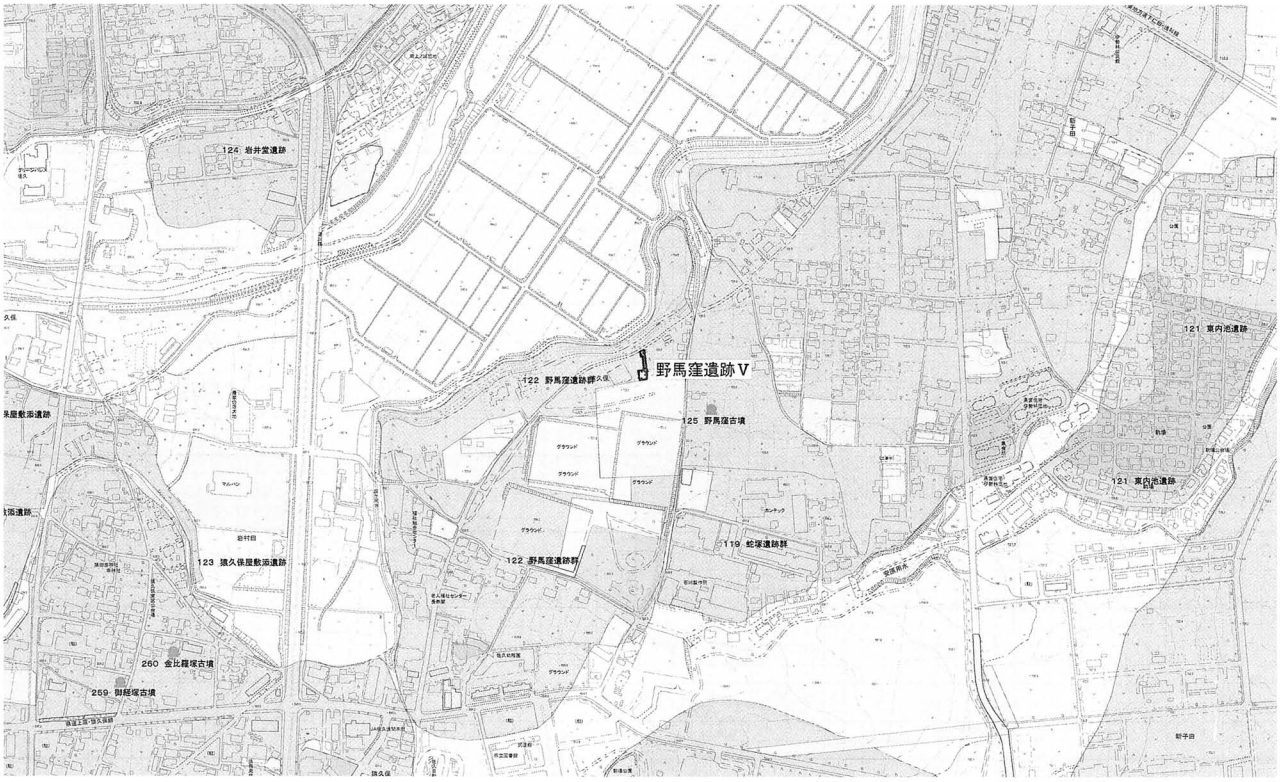
野馬窪遺跡群は、西流する湯川左岸の浅間第一軽石流に形成された台地上にある。標高は、700ｍ前後を測り、調査対象地点から南方に緩やかに傾斜している。

野馬窪遺跡群内では、４次の発掘調査と平成13・14・17年度の試掘調査で弥生時代・平安時代・中世の集落が検出されている。

今回、株式会社エヌ･ティ･ティ･ドコモ長野支店により移動通信用無線基地局が建設されることになり、平成22年８月３日～平成22年８月11・25日に試掘調査を行った。その結果、平安時代の土師器・須恵器・灰釉陶器が出土し、竪穴住居址１棟も検出された。保護協議の結果、記録保存調査を行うことになった。

平成23年４月18日付けで発掘調査委託契約を締結し、発掘調査を実施した。

調査対象地は、鋼管柱基礎工事範囲・維持管理道路及び工事に係る立木伐採・抜根範囲である。



第２図　野馬窪遺跡Ⅴ周辺遺跡（１：10,000）

2　調査組織

平成23・24年度

調査主体者　佐久市教育委員会　教育長　土屋　盛夫

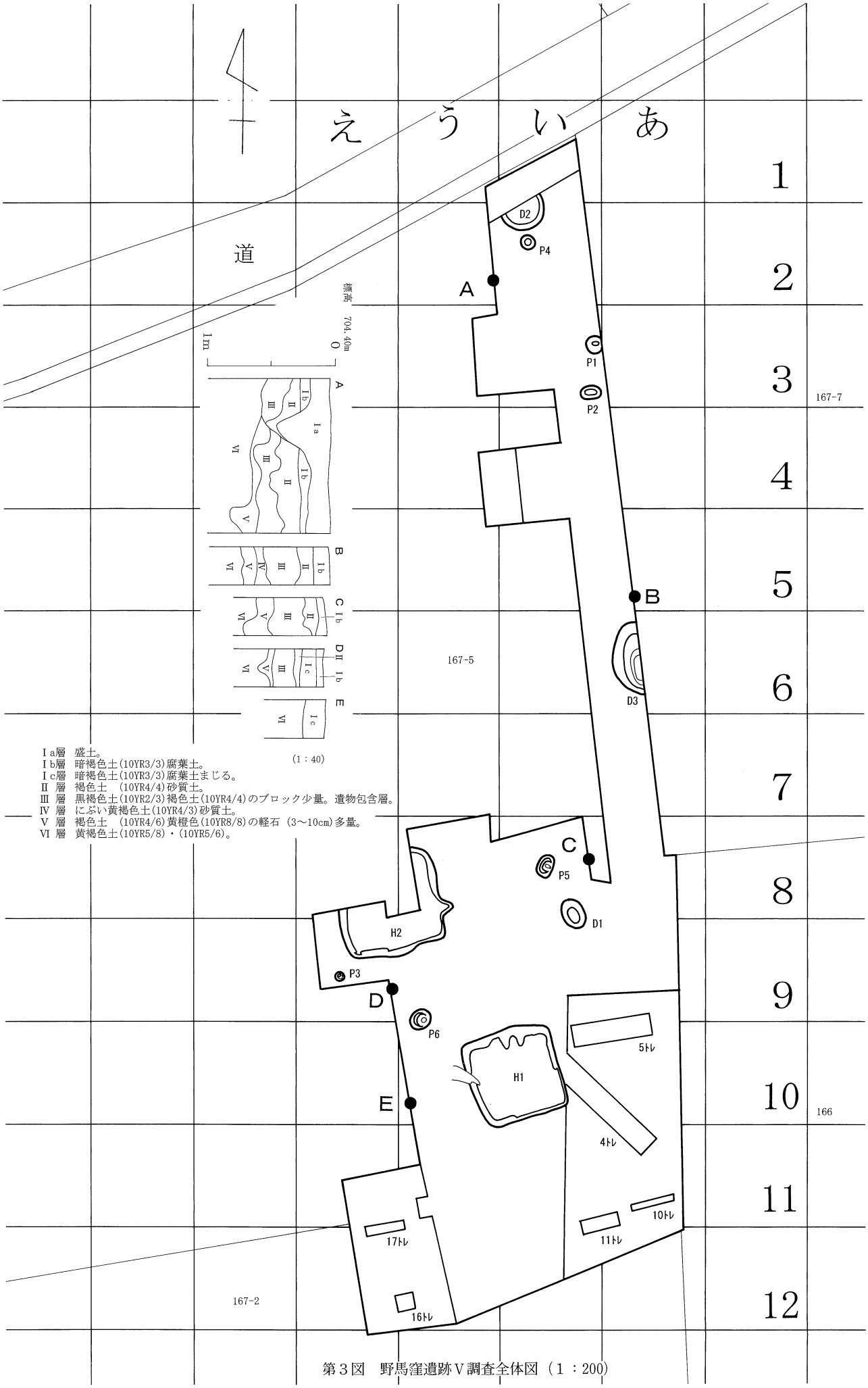
事　務　局　社会教育部長　伊藤　明弘

文化財課長　吉澤　隆

文化財係長　三石　宗一

文化財調査係専門員　林　幸彦　須藤　隆司　小林　眞寿　羽毛田卓也　冨沢　一明　上原　学

文化財調査係　並木　節子　神津　和明(23年10月～)井出　泰章(～23年９月)



第３図　野馬窪遺跡Ⅴ調査全体図（１：200）

出澤　力(～23年６月)　久保浩一郎(24年４月～)

調査体制

調査担当者　林　幸彦　　佐々木宗昭

調　査　員　赤羽根充江　磯貝律子　市川光吉　岩松茂年　　神津和子　神津千春　　小林節子
小林千勝　　清水律子　副島充子　田中ひさ子　中山清美　広瀬梨恵子　柳沢孝子

３　調査日誌

平成23年８月22日　調査仮設事務所・調査員等車両置き場使用許可を佐久市土地開発公社に申請。
８月26日　佐久市土地開発公社より使用許可される。
８月29日　重機等賃貸借業務契約締結。　30日基準点基準線設定業務委託契約締結。
８月31日　調査対象範囲の最終確認(大明株式会社担当者、文化財課担当者)。
９月３日　仮設事務所・トイレ設置。
９月５日　重機により表土削平、併行して遺構プラン確認。
９月７日　基準点基準線設定(測量杭打設)。
９月９日　Ｈ１・Ｈ２号住居址掘り下げ始め。
９月12日～27日　遺構掘り下げ、随時記録図面作成･写真撮影。
９月21日　台風15号に備える。
９月29日　全体写真、器材撤収。
９月29・30日埋戻し作業。10月４日埋戻し細部補足作業。
10月６日　長野県教育委員会に発掘調査終了報告書を提出する。
佐久警察署に埋蔵文化財発見届けを提出する。
９月21日～12月２日　出土遺物・記録の整理作業。
平成24年６月５日～８月17日　実測・写真撮影。原稿の執筆、報告書の作成。
11月５日　報告書刊行をもって調査終了。

第Ⅱ章　遺構と遺物

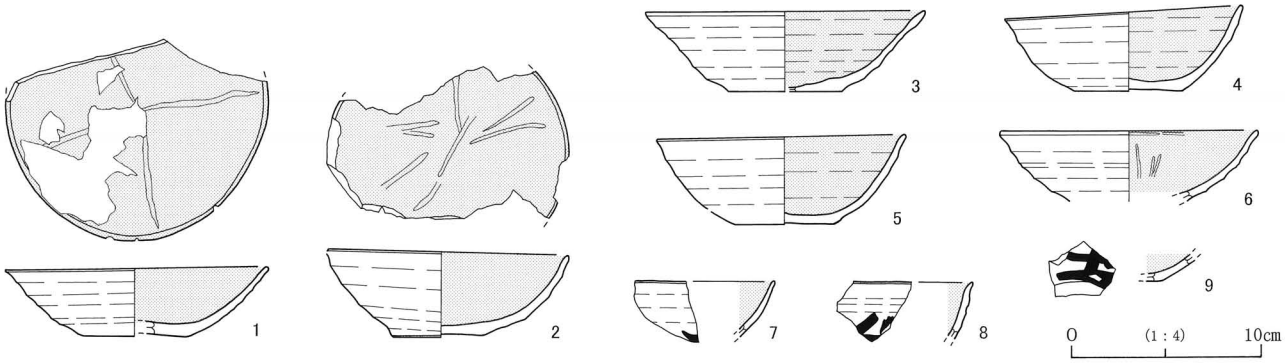
検出遺構・遺物の概要

遺構　竪穴住居址２軒(平安時代)土坑３基(平安時代１基他)ピット６基
遺物　縄文時代後期土器、弥生時代後期土器、平安時代石器(土師器・灰釉陶器)、鉄器、石器

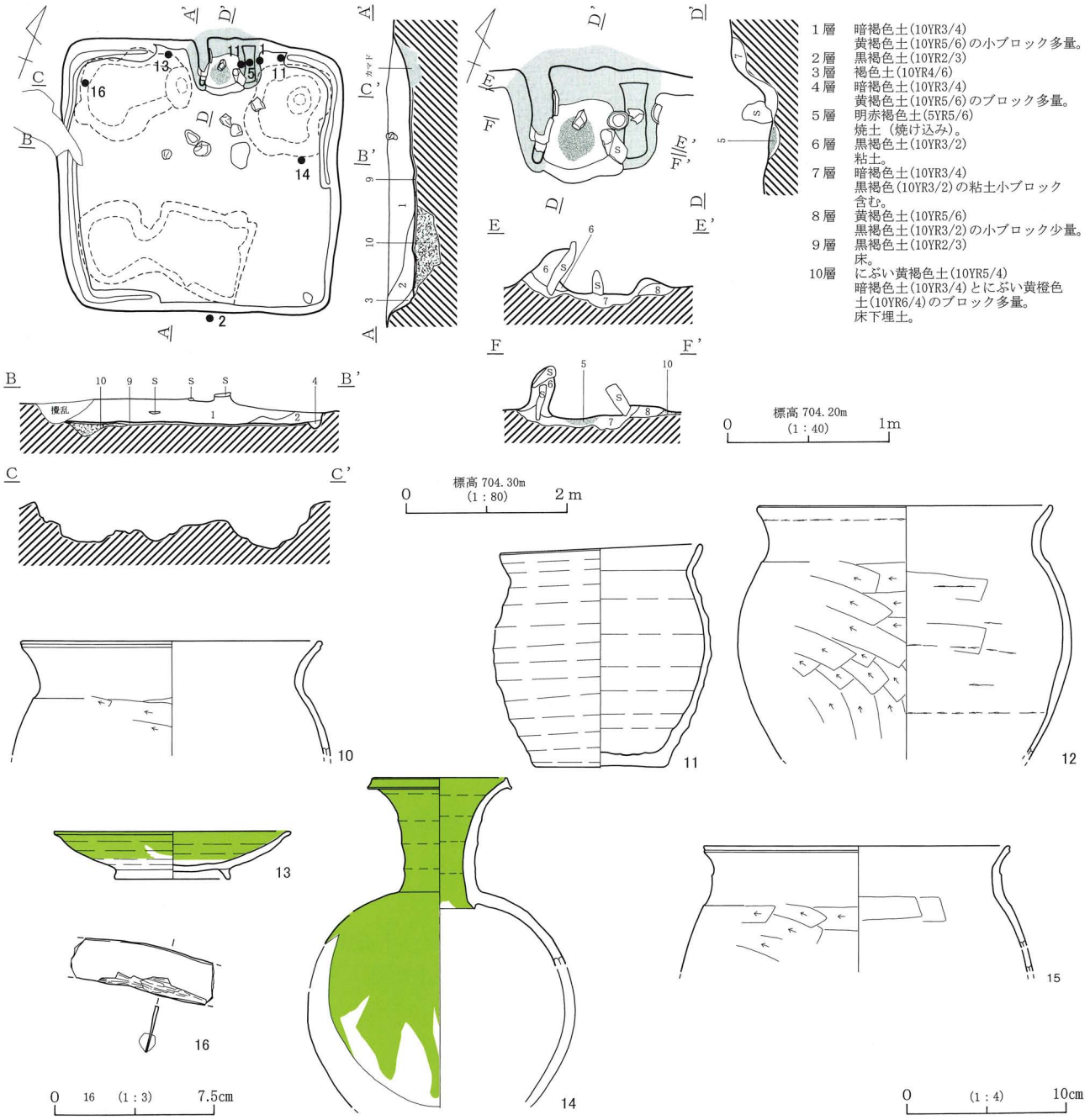
１　竪穴住居址

１）　Ｈ１号住居址

い・う－10Grにあり、北壁3.3ｍ・東壁3.1ｍ・南壁3.2ｍ・西壁3.1ｍ、壁高は30㎝、主軸方位はＮ-17°-Ｗを示す。



第４図　Ｈ１号住居址出土遺物実測図（１）



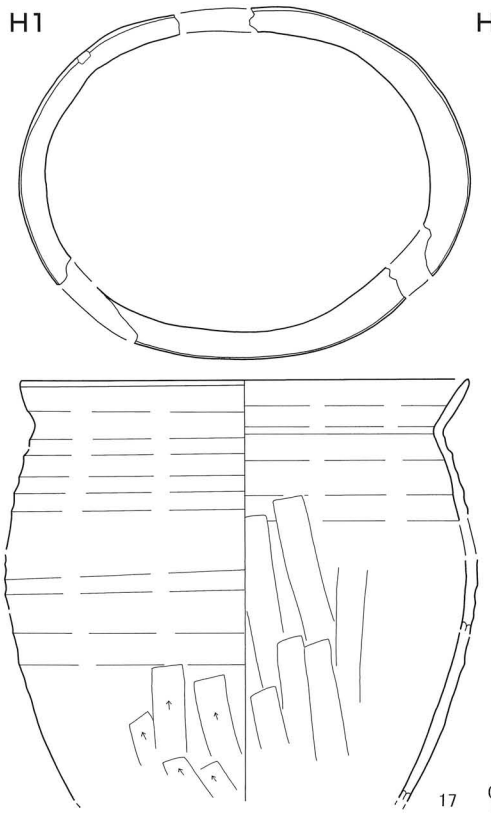
第５図　Ｈ１号住居址実測図および出土遺物実測図（２）

カマドは北壁の中央に粘土と安山岩により構築されている。袖石の下端は地山を浅く掘り置かれている。床面・掘方から明確な柱穴は、確認できなかった。

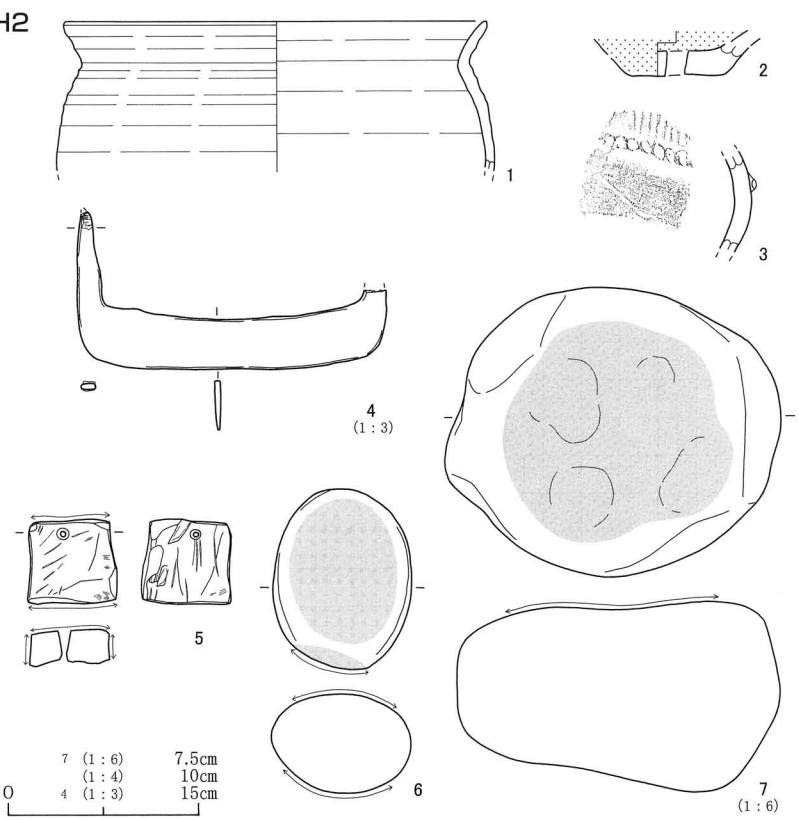
壁溝が東・南壁の一部を除き認められた。床面は堅く締まりほぼ平坦である。掘方は壁寄りが深い。

遺物は、土師器・灰釉陶器・石器がある。須恵器は坏小片が１点みられた。１～５は土師器坏で～４が内面黒色処理される。６～９は土師器坏か碗で内面黒色処理され、７～９体部外面に文字判明しない墨書が認められる。10・11・12・15・17は土師器甕、12・15は頸部「コ」の字「武蔵甕」、11・17は土師器ロクロ甕である。13は灰釉陶器皿、14は灰釉陶器長頸壺でいづれも釉は漬け掛けである。16は鎌とみられ、刃部に木質が残る。

本址は９世紀後半に位置づけられる。



第６図　Ｈ１号住居址出土遺物実測図（３）



第７図　Ｈ２号住居址出土遺物実測図（１）

２）　Ｈ２号住居址

う・え－８・９Grにあり約半分が調査区域外にある。検出北壁0.6ｍ・東壁3.3ｍ・南壁3.7ｍ・検出西壁1.94ｍ壁高は41㎝主軸方位Ｎ-79°-Ｅを示す。

カマドは東壁中央に粘土と砂岩･安山岩により構築されている。面取された砂岩をが材材の袖部は、袖石下端の地山を掘り置かれている。カマド東脇床面の長さ60㎝の安山岩も構築材であろう。

径50㎝深さ15㎝のＰ１が掘方から、検出された。壁溝が東・南壁一部を除き認められた。床面は堅く締まりほぼ平坦である。カマド左袖脇床面から16の鎌が出土した。

遺物は、土師器・灰釉陶器・鉄器・石器がある。須恵器は坏・甕小片が１点みられた。

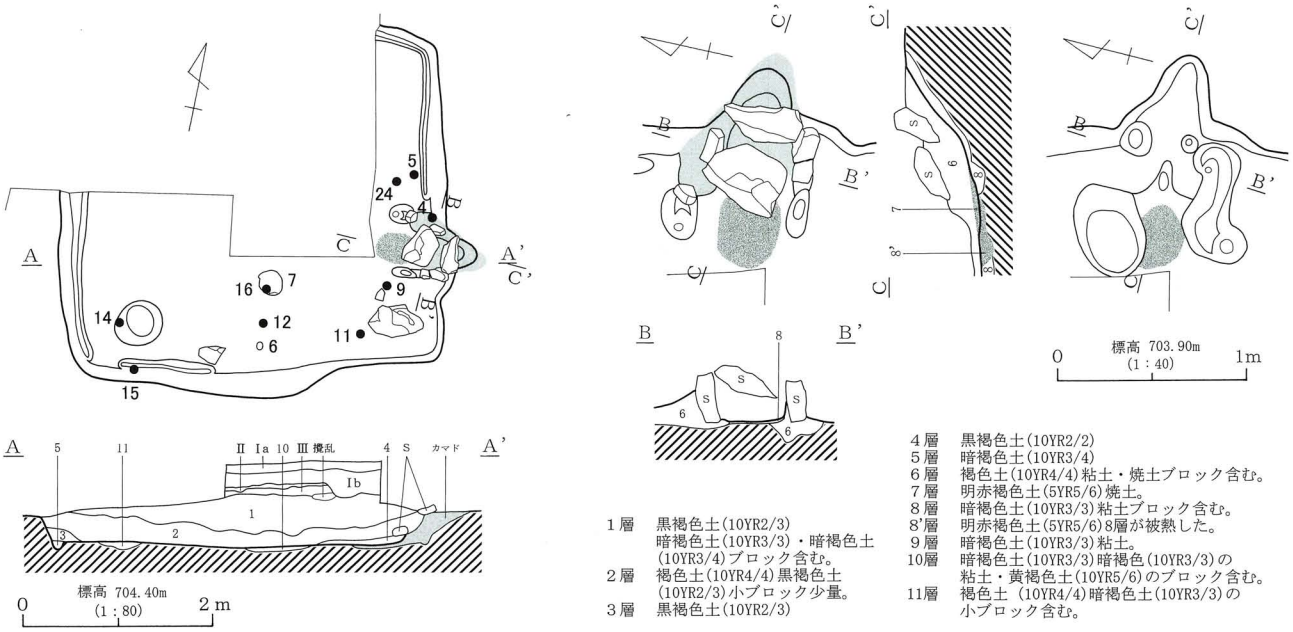
８～12は内面黒色処理される土師器坏、13～18が土師器碗、14～18が内面黒色処理される、19～23は土師器坏か碗で19～22が内面黒色処理される。12・15・19は体部外面に文字判明しない墨書が認められる。24は灰釉陶器皿か碗、１・25～27は土師器ロクロ甕、25は外面ヘラケズリ内面にロクロ調整がうかがえる。４は大きめの苧引金具、装着部に木質が残る。５は一孔持つ流紋岩の砥石６面に使用痕がみえる。６は安山岩の磨石。７は安山岩の台石。２の内外面赤彩され一孔の有孔鉢と、３の縄文後期深鉢は混入である。

本址は９世紀後半に位置づけられる。

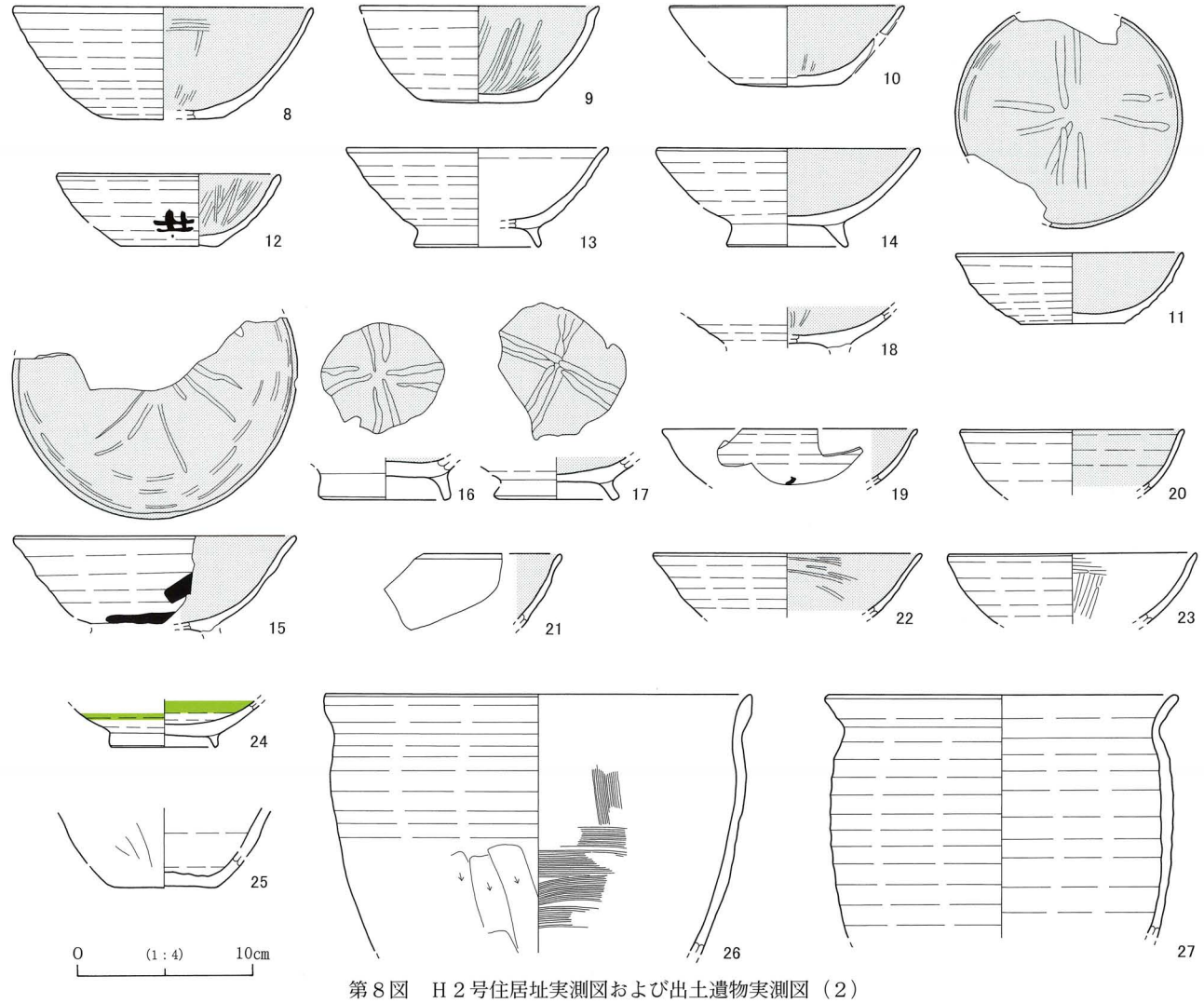
２　土坑

１）　Ｄ１号土坑

い－８・９Grにあり、長軸長116㎝短軸長98㎝壁高38㎝、平面楕円形、断面は逆梯形。長軸方位はＮ-14°-Ｗを示す。覆土は地山の明黄褐色土ブロックを含む人為的埋土であった。



1層　黒褐色土(10YR2/3)
　　暗褐色土(10YR3/3)・暗褐色土(10YR3/4)ブロック含む。
2層　褐色土(10YR4/4)黒褐色土(10YR2/3)小ブロック少量。
3層　黒褐色土(10YR2/3)
4層　黒褐色土(10YR2/2)
5層　暗褐色土(10YR3/4)
6層　褐色土(10YR4/4)粘土・焼土ブロック含む。
7層　明赤褐色土(5YR5/6)焼土。
8層　暗褐色土(10YR3/3)粘土ブロック含む。
8'層　明赤褐色土(5YR5/6)8層が被熱した。
9層　暗褐色土(10YR3/3)粘土。
10層　暗褐色土(10YR3/3)暗褐色(10YR3/3)の粘土・黄褐色土(10YR5/6)のブロック含む。
11層　褐色土（10YR4/4)暗褐色土(10YR3/3)の小ブロック含む。

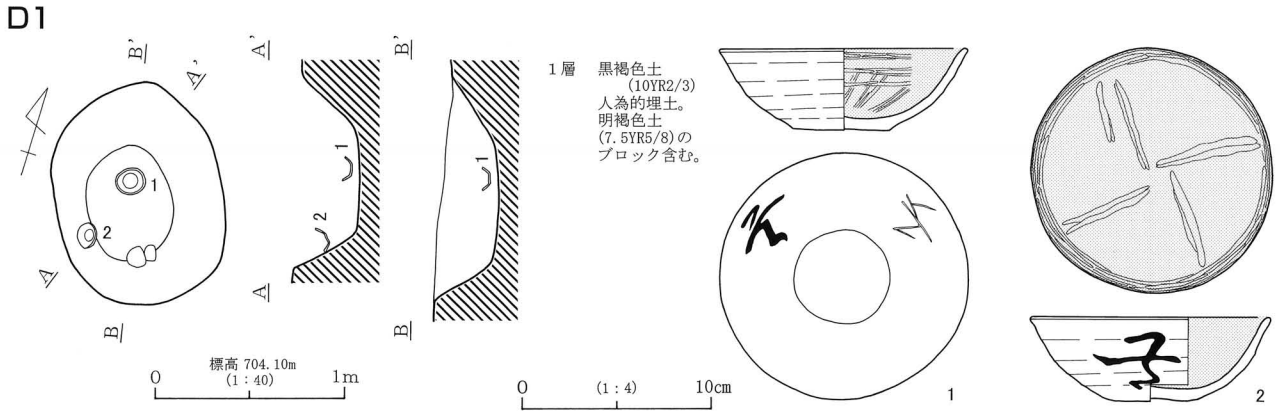


第８図　Ｈ２号住居址実測図および出土遺物実測図（２）

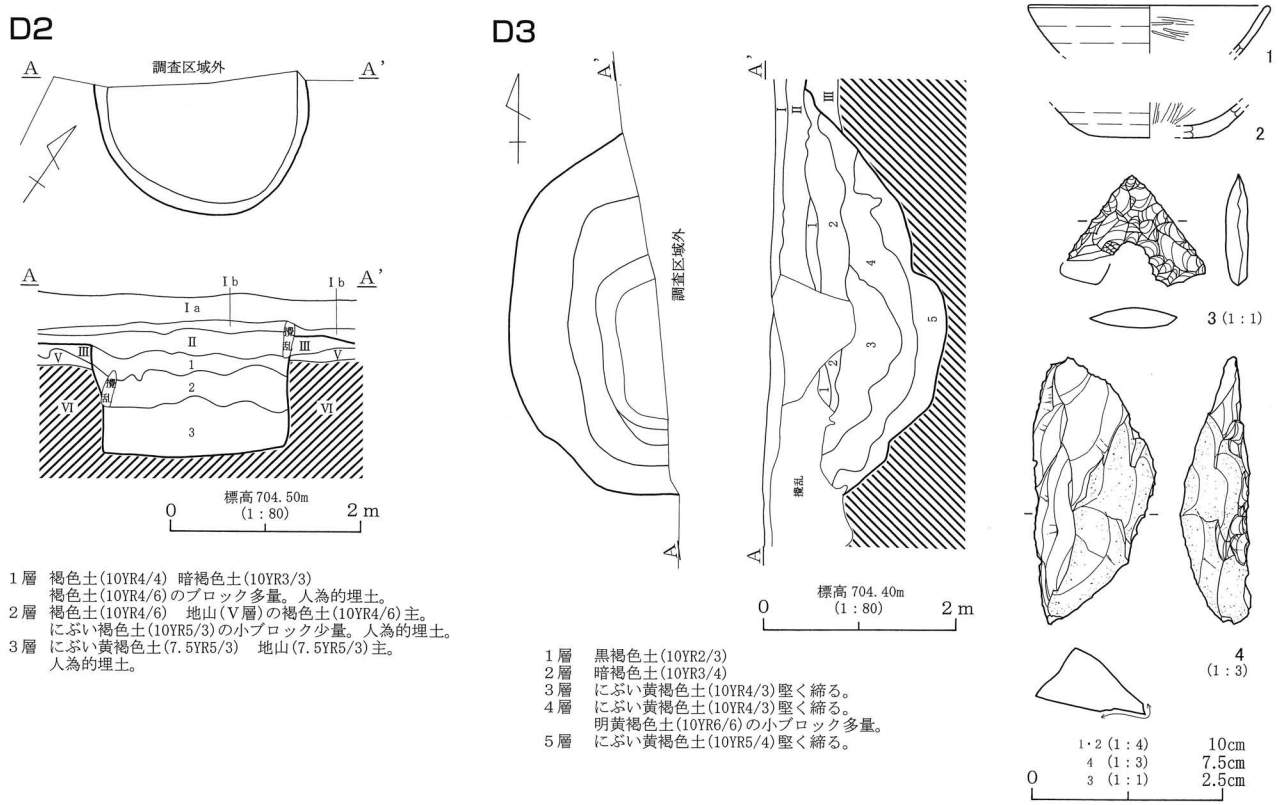
遺物は、１・２の土師器坏と土師器坏･碗小片２点が出土した。１・２とも内面黒色処理される。１は体部外面に「子」の墨書と刻書が認められる。２の体部外面には「子」の墨書が認められる。
本址は９世紀後半に位置づけられる。

２） Ｄ２号土坑

い－２Grにあり北半分が調査区域外にある。直径166cmの円形とみられ、壁高112cm、断面は逆梯形を呈する。覆土２・３層は地山のにぶい褐色土・褐色土を含む人為的埋土であった。平安時代の遺物包含層である全体層序Ⅲ層を掘り込んでいる。
出土遺物は皆無であり、本址の時期は不明である。



第９図　Ｄ１号土坑実測図および出土遺物実測図



第10図　Ｄ２号・Ｄ３号土坑実測図および出土遺物実測図

3） Ｄ３号土坑

あ－６Grにあり東半分が調査区域外にある。検出部南北長290㎝、壁高110㎝、断面はテラスを有する逆梯形を呈する。覆土３～５層は、堅く締まる。平安時代の遺物包含層である全体層序Ⅲ層を掘り込んでいる。

遺物は、１・２の土師器坏、黒曜石の石鏃３、安山岩の二次加工ある剥片４が出土した。２は底部回転糸切りがみえる。

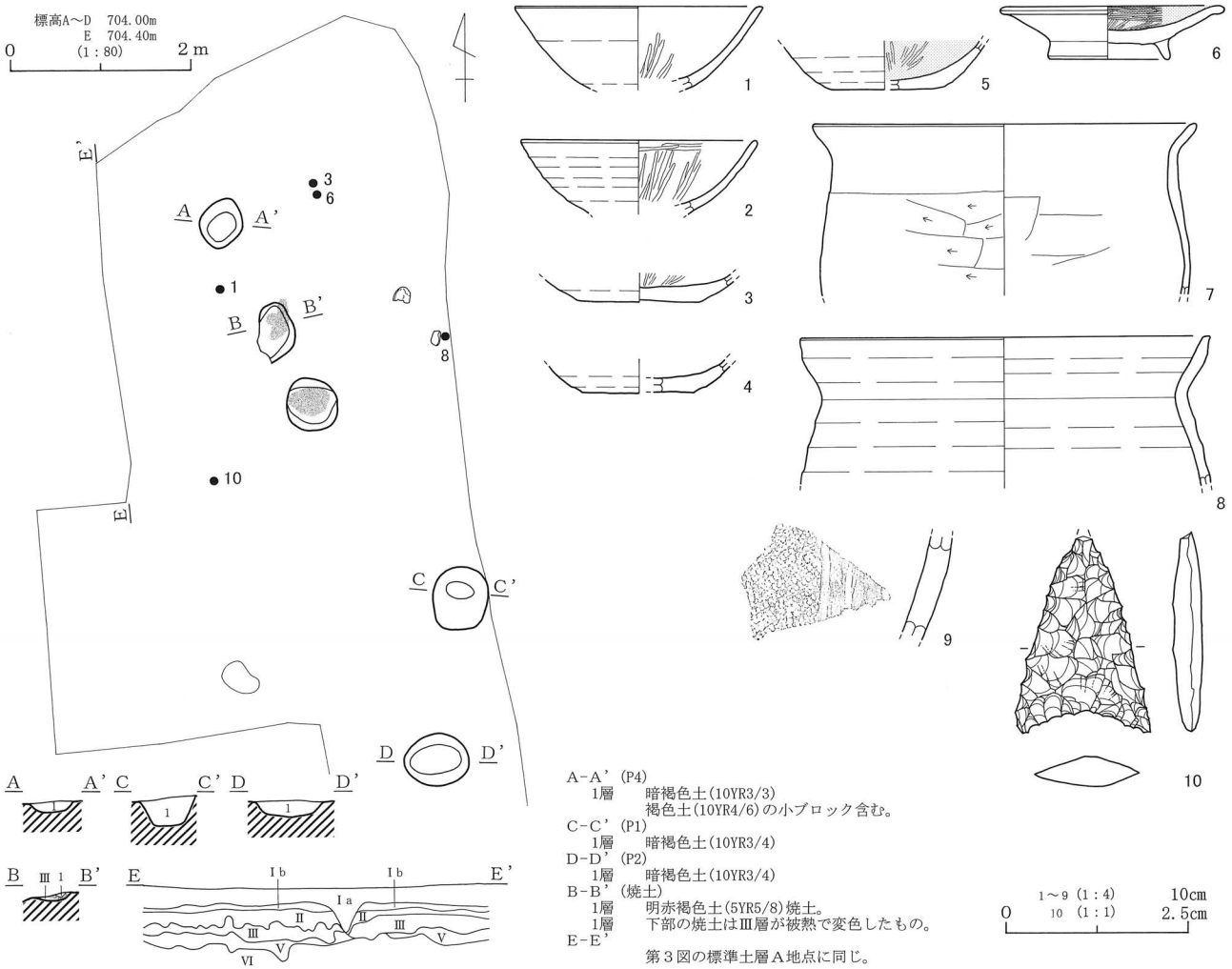
本址の時期は、平安時代以降であろう。

３　その他

ピットが６基検出された。Ｐ1は平面円形で長径70㎝短径60㎝深さ33㎝、Ｐ2は平面楕円形で長径74㎝短径56㎝深さ18㎝、Ｐ3は円形で長径40㎝短径36㎝深さ41㎝柱痕14㎝が確認された。Ｐ4は長径57㎝短径46㎝深さ14㎝の円形、Ｐ5は長径80㎝短径58㎝深さ63㎝の楕円形テラスを有する。Ｐ6は長径84㎝短径78㎝深さ27㎝の円形でテラスを有する。Ｐ2から土師器３片が出土した。

い－２Grに北東から南西に傾斜する僅かな窪地があり、全体層序Ａ地点周囲でⅢ層の堆積(層厚20～30㎝)がみられた。Ⅲ層最下部に焼土の堆積とⅢ層が被熱で赤色に変化した範囲が２カ所確認された。付近に住居址床面などは、確認されなかった。

い－２GrⅢ層から土師器坏(３～５)・皿(６)坏か碗(１・２)、土師器甕(７・８)、縄文土器(９)、黒曜石の石鏃(10)が出土した。土師器は、Ｈ１・２号住居址と同一時期の９世紀後半に比定される



第11図　Ｐ1・Ｐ2・Ｐ4・焼土分布範囲実測図および遺構外出土遺物実測図

1　野馬窪遺跡群遠景（北東より、立蓼山・八ヶ岳が遠望できる）

2　野馬窪遺跡群遠景（北方より、台地上中央が野馬窪遺跡Ⅴ。手前に湯川が西流する）

3　野馬窪遺跡Ⅴ遠景（南西より、調査地点は前方林の中）

1　調査範囲全景（南より）

2　Ｈ１号住居址（南より）

1　Ｈ１号住居址掘り方（北より）

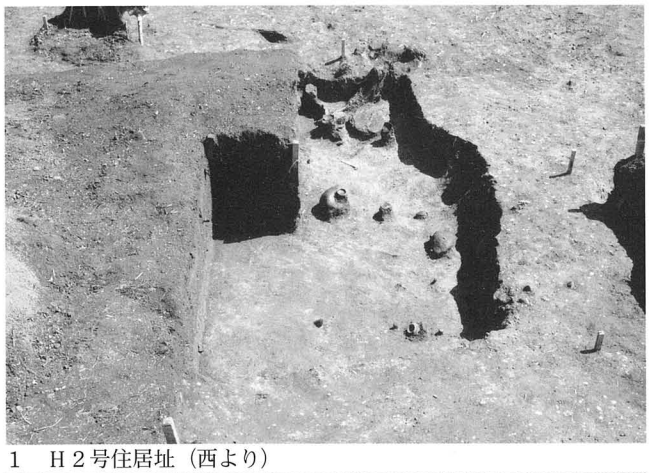
2　Ｈ１号住居址（南より）

3　Ｈ１号住居址カマド（南より）

4　Ｈ１号住居址カマド掘り方（北より）

5　Ｈ２号住居址（南より）

図版 4



1　Ｈ２号住居址（西より）

2　Ｈ２号住居址カマド（西より）

3　Ｈ２号住居址カマド掘り方（東より）

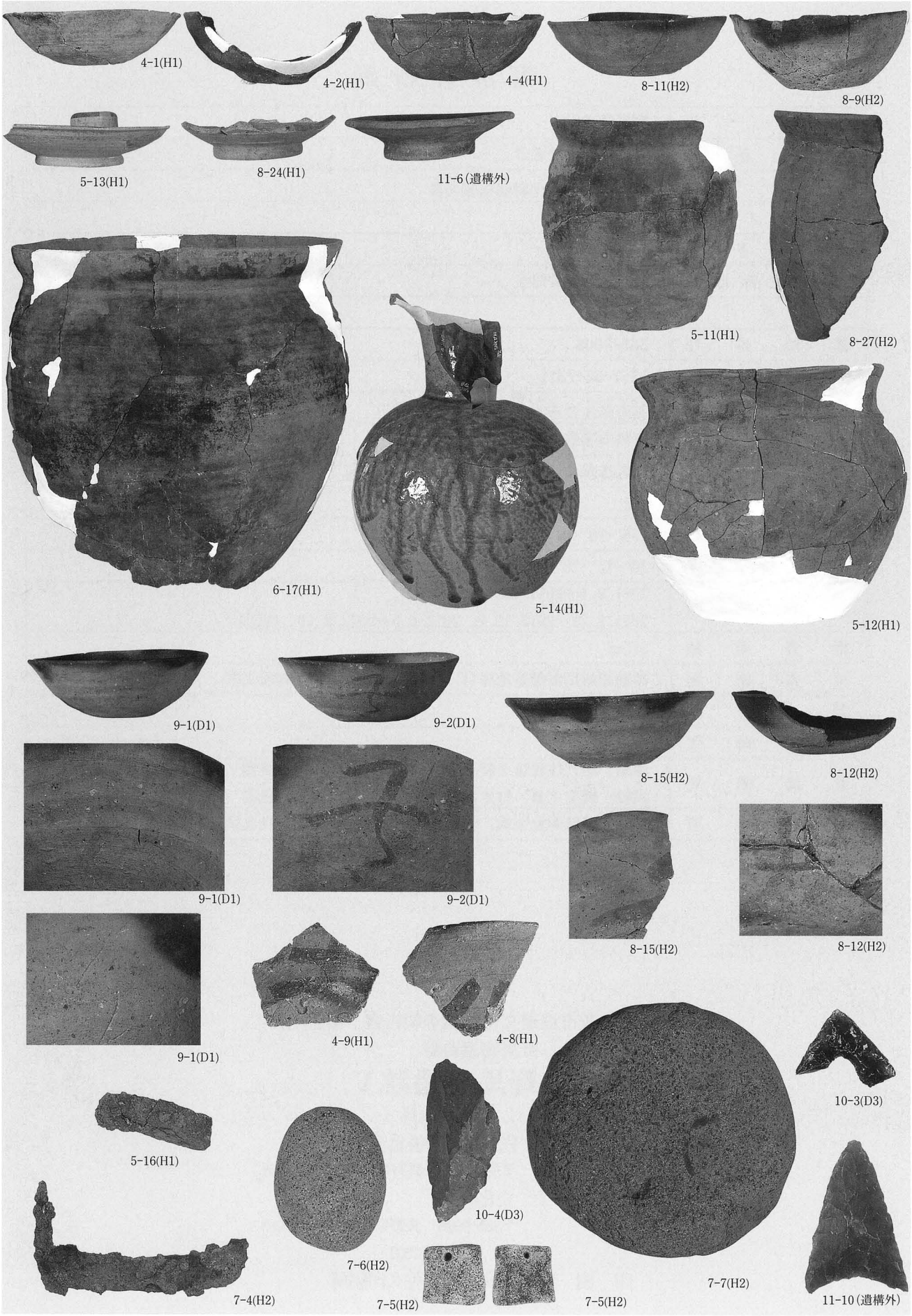
4　Ｈ２号住居址カマド周辺遺物出土状態（西より）

5　Ｄ１号土坑（北より）

6　Ｄ２号土坑（南より）

7　Ｄ２号土坑（南より）

8　Ｄ３号土坑（北より）


4-1(H1)
4-2(H1)
4-4(H1)
8-11(H2)
8-9(H2)
5-13(H1)
8-24(H1)
11-6(遺構外)
5-11(H1)
8-27(H2)
6-17(H1)
5-14(H1)
5-12(H1)
9-1(D1)
9-2(D1)
8-15(H2)
8-12(H2)
9-1(D1)
9-2(D1)
8-15(H2)
8-12(H2)
9-1(D1)
4-9(H1)
4-8(H1)
10-3(D3)
5-16(H1)
10-4(D3)
7-6(H2)
7-7(H2)
7-4(H2)
7-5(H2)
7-5(H2)
11-10(遺構外)

出土遺物

報告書抄録

書名	野馬窪遺跡Ⅴ
ふりがな	のまくぼいせきご
シリーズ名	佐久市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第204集
編著者名	林　幸彦
編集・発行機関	佐久市教育委員会
発行年月日	2013.3.31
郵便番号	385-0006
電話番号	0267-68-7321
住所	長野県佐久市志賀5953
遺跡名	野馬窪遺跡Ⅴ（ＳＮＫＶ）
遺跡所在地	佐久市猿久保167-５
遺跡番号	122
経度	138°-29′-21″（世界測地系）
緯度	36°-15′-28″（世界測地系）
調査期間	2011.9.4～2011.10.4　（現場） 2011.9.21～2012.12.2、2012.6.5～2012.8.17　（整理）
調査面積	215㎡
調査原因	移動通信用無線基地局（ＣＶ佐久猿久保　ＲＫ）建設工事
種別	集落址
主な時代	平安時代
遺跡概要	遺構　竪穴住居址２軒（平安）　土坑３基　ピット６個 遺物　縄文土器　弥生土器　土師器　灰釉陶器　鉄器　石器
特記事項	野馬窪遺跡群北東端、湯川を望む断崖上の平安時代集落址一端が確認された。

佐久市埋蔵文化財調査報告書　第204集
野馬窪遺跡群
野馬窪遺跡Ⅴ
2013年3月
編集・発行　佐久市教育委員会
〒385-8501　長野県佐久市中込3056
文化財課
〒385-0006　長野県佐久市志賀5953
TEL　0267-68-7321
印刷所　株式会社　佐久印刷所